

女子ラグビーの普及と強化に向けた一考察

A study on diffusion and reinforcement of women's rugby in Japan

1K07B019-1 井上徹也

指導教員 主査 作野誠一准教授

副査 中村千秋准教授

【緒言】

高校ラグビーの予選参加校数が最多だったのは第71回大会(91年度)の1490校。1984~1985年にかけて高校ラグビーを題材としたテレビドラマ「スクール・ウォーズ」が放映され、人気が高まった。しかし、今は900校台で増減を繰り返している。人気はもちろんのこと、競技人口においても他のスポーツと比較しても大きな差がある。部活としてラグビーを採用している小、中学校が少ないため、競技をするうえでの受け皿が足りていないのが現状である。

さらに野球では今年から女子のプロ野球が開幕し、サッカーでは、なでしこジャパンが活躍するなど、女性からの認知度を上げると共に、女性が競技するスポーツとして世間の見方を変えつつある。しかし女子ラグビーの取り組みは情報が少なく、世間からの認知度は低い。ラグビーでは、7人制ラグビー(男女)が2016年のリオデジャネイロオリンピックから正式種目に採用されるなど、日本国内で多くの人々にラグビーを広める第一歩として一層の強化・普及が求められている。このような現状を踏まえ、女子ラグビーが現在抱えている問題を明らかにすると共に、認知度の向上、今後競技人口、活動環境を増やしていくための対策を打ち出したいと考えた。

【研究方法】

先行研究、関連資料分析及びウェブ調査を元に、現在のラグビーの取り巻く現状を明らかにするとともに、自分自身の経験、著書などからラグビーの魅力、楽しさなどを明らかにする。また女子ラグビー団体関係者(江戸川レディーズコーチ吉田茂氏、同選手田中孝代氏)へのインタビュー調査を行い、女子ラグビーが抱えている問題、課題等を明らかにするとともに、一定の提言を試みる。

【結果と考察】

女子ラグビー団体者へのインタビュー及び、女子合同練習会の見学を行うことで、女子ラグビーが抱える具体的な課題が明らかとなった。

①女子ラグビーの練習環境の少なさ

②練習の質、量の改善

③指導者の育成、強化

④代表レベルの選手の育成、強化

上記の問題を解決し、女子ラグビーの普及と強化を進める上で二つの提言を行う。これらの提言によって、女子ラグビーが現在抱えている競技人口の増加、競技レベルの向上の課題を解決できるものとする。

①小、中学生世代のクラブチーム作り

小、中学生世代のクラブチーム作りを全国各地に広げていくことで、地方でもラグビーを行える環境が整う。現在日本女子ラグビー連盟に加盟している女子ラグビーチームは26チーム。このすべてのチームが、小、中学生世代を中心に活動をしているわけではなく、代表選手を中心に競技レベル向上を目的に活動しているチームも多いため、小、中学生世代のクラブチーム作りは必要不可欠である。

②女子ラグビーの企業スポーツ化

また今現在、女子ラグビー界に存在しない国内リーグの誕生は、小、中学生や高校生がラグビーを続けるうえでのモチベーションの向上にもつながり、将来の明確な目標としてラグビー選手をとらえることができ、なおかつ競技人口の増加、競技レベルの向上にも貢献するものと考えられる。

【まとめ】

日本女子ラグビー連盟が設立されてまだ22年とその歴史は浅い。そのため現在女子ラグビーが抱える課題は数多くあるものの、インタビューを通じて、これから様々な普及活動、取り組みが本格的に始動する感触を得た。今後は代表選手の強化だけではなく、普及活動にもっと目を向けなければならない。またその子供たちに合わせた練習環境を提供し、ラグビー離れを防ぐことも必要だ。競技者である子供のレベルアップと共に現在、日本ラグビー協会が競技者拡大、競技レベル向上のための政策として進めているRDOシステム(地域開発担当者)の早期の実現など指導者の質の向上も女子ラグビーのみならず、日本のラグビー界に求められている。